

学歴意識に関する調査研究（3）

原田 彰（広島大学） 山崎博敏（広島大学）

○作田良三（広島大学）○岡田典子（広島大学大学院） 池田隆英（広島大学大学院）

I はじめに

一昨年（1998年）の日本教育社会学会第49回大会における「学歴意識に関する調査研究（1）」では、調査（第1回調査）データをもとに、「私にとっての学歴」と「社会のなかの学歴」に焦点を当て、その結果について考察を行った（分析結果については、広島大学教育社会学研究室『教育社会学研究年報』第1号を参照のこと）。

昨年は、第1回調査と同じ対象者に調査（第2回調査）を行い、日本教育社会学会第50回大会において「学歴意識に関する調査研究（2）」と題して発表を行った。そのなかで我々は、「日常生活上の諸能力と学歴意識との関連」に着目した。その分析の結果、日常生活で必要と考えられる能力について、「言語構成能力」「漢字の読み書き能力」「技術的操作能力」という3つの成分が抽出され、このうち「言語構成能力」と「技術的操作能力」に対しては「本人の学歴」と「中学校時代の成績」が正の影響を及ぼしていることが明らかとなった。また、「言語構成能力」と「学歴コンプレックス（学歴による恥の経験）」のあいだに負の相関があり、ともに「本人の学歴」が著しく影響していることが見出された（詳細は、広島大学教育社会学研究室『教育社会学研究年報』第2号を参照のこと）。

そこで今回の発表では、前回調査の分析結果をふまえ、諸能力と学歴意識との関連について、第3回調査を実施し、次の3点について分析・考察を行う。

（1）日常生活上の諸能力と学歴意識

日常生活をおくる上で必要だと考えられる諸能力の項目を前回より増やし、改めてその規定要因および学歴意識との関連を調べる。

（2）仕事上の諸能力と学歴意識

仕事の際に必要なと考えられる諸能力の自己評価を測定し、その規定要因および学歴意識との関連について、さらには仕事に対する満足度との関連について分析・考察を行う。

（3）学校知・時事問題の認知と学歴意識

かつて学校で教わった知識を、現在どれだけ保持しているのか、また、昨今の時事問題に関してどれだけの知識を持っているのか、その認知度を測定する。そのうえで、学歴意識との関連を調べる。

II 第3回調査の概要

調査は、1999年7月、選挙人名簿をもとに層化抽出法によって抽出した、広島市P区の1500名と東広島市の1000名、合わせて2500名を対象に実施した。いずれも、広島市のベッドタウンとしての機能を持つ地域を選定している。なお、質問紙の分量や職業上の諸能力に関する質問項目を含むこと等の理由により、比較的有效回答が得にくい60歳を超える人はサンプリングの際に除外した。

質問紙は、3つのセクションから構成されている。第一セクションは、回答者の属性に関する項目群であり、それと併せて、両親や配偶者の学歴・職業についても尋ねている。第二セクションは、学校知や時事問題に対する認知度、および職業上・日常生活上の諸能力に関する自己評価の項目で構成されている。第三セクションは、学歴効用感や学歴による不利な経験など、学歴意識に関わる項目群である。

返送された有効回答部数は580であり、回収率は23.2%であった。表2-1～2-6は、回答者の属性を示している。なお、表2-3～2-6中の本人の学歴のうち、「短大卒」には高専・専修学校卒の者を含み、「大卒」には大学院修了の者を含んでいる。また、表2-5中の父親の学歴については、短大卒に高専・専修学校卒が含まれている。

回答者は、女性の方がやや多く、また、年齢の高い人の割合は男性の方が高い（表2-1）。職業についていえば、男性は企業・団体等の勤め人が半数以上、女性は専業主婦が約3分の1を占めている（表2-2）。

学歴については、全体では高卒の割合が38.4%と高いが、男性では大卒が半数近くを占

め、女性でも短大卒が高卒よりも若干多い（表2-3）。また男女ともに、年齢が高くなるほど学歴が低くなる傾向がみられる（表2-4）。ヨコの学歴に関しては、大卒190名のうち、67.4%が私立大学出身であり、旧帝大卒は4.2%である。また、62.0%が文系の学部を卒業している。高卒については、39.9%が普通科出身である。

表2-1 回答者の年齢（性別）

	20-35歳	36-50歳	51歳以上	合計
男性	58 22.9	111 43.9	84 33.2	253 100.0
女性	98 30.0	133 40.7	96 29.4	327 100.0
合計	156 26.9	244 42.1	180 31.0	580 100.0

表2-3 回答者の学歴（性別）

	中卒	高卒	短大卒	大卒	無回答	合計
男性	9 3.6	100 39.5	24 9.5	120 47.4	0 0.0	253 100.0
女性	3 0.9	123 37.6	129 39.4	70 21.4	2 0.6	327 100.0
合計	12 2.1	223 38.4	153 26.4	190 32.8	2 0.3	580 100.0

表2-4 回答者の学歴（性別・年齢別）

	男性					女性				
	中卒	高卒	短大卒	大卒	合計	中卒	高卒	短大卒	大卒	無回答
20-35歳	0 0.0	16 27.6	10 17.2	32 55.2	58 100.0	0 0.0	20 20.4	49 50.0	28 28.6	1 1.0
36-50歳	0 0.0	39 35.1	10 9.0	62 55.9	111 100.0	1 0.8	48 36.1	53 39.8	31 23.3	0 0.0
51歳以上	9 10.7	45 53.6	4 4.8	26 31.0	84 100.0	2 2.1	55 57.3	27 28.1	11 11.5	1 1.0
合計	9 3.6	100 39.5	24 9.5	120 47.4	253 100.0	3 0.9	123 37.6	129 39.4	70 21.4	2 0.6

表2-5 父親の学歴（本人の年齢別・学歴別）

		父親の学歴					合計
		中卒	高卒	短大卒	大卒	無回答	
年齢別	20-35歳	14 9.0	76 48.7	6 3.8	41 26.3	19 12.2	156 100.0
	36-50歳	100 41.0	65 26.6	2 0.8	60 24.6	17 7.0	244 100.0
	51歳以上	79 43.9	50 27.8	1 0.6	26 14.4	24 13.3	180 100.0
学歴別	中卒	6 50.0	2 16.7	0 0.0	0 0.0	4 33.3	12 100.0
	高卒	105 47.1	61 27.4	2 0.9	23 10.3	32 14.3	223 100.0
	短大卒	39 25.5	57 37.3	4 2.6	39 25.5	14 9.2	153 100.0
	大卒	42 22.1	71 37.4	3 1.6	64 33.7	10 5.3	190 100.0
	無回答	1 50.0	0 0.0	0 0.0	1 50.0	0 0.0	2 100.0
	合計	193 33.3	191 32.9	9 1.6	127 21.9	60 10.3	580 100.0

そのほか、表2-5からは、本人の年齢が高くなるほど父親の学歴段階が低くなり、本人の学歴が低いほど父親の学歴段階が低くなる傾向がみられる。また表2-6からは、15歳当時の家の暮らし向きが「普通だった」という人がどの世代も過半数であるが、学歴が低いほど「貧しい方だった」と回答する人が多くなる傾向にある。

表2-2 回答者の職業（性別）

	農林水産業	商工・サービス業	自由業	企業・団体等の役員	企業・団体等の勤め人	臨時・パート・アルバイト	公務員
男性	1 0.4	23 9.1	6 2.4	19 7.5	135 53.4	2 0.8	30 11.9
女性	0 0.0	23 7.0	2 0.6	3 0.9	59 18.0	67 20.5	11 3.4
合計	1 0.2	46 7.9	8 1.4	22 3.8	194 33.4	69 11.9	41 7.1
	学校等の教員	専業主婦	学生	無職	その他	無回答	合計
男性	5 2.0	0 0.0	8 3.2	9 3.6	10 4.0	5 2.0	253 100.0
女性	8 2.4	105 32.1	9 2.8	20 6.1	14 4.3	6 1.8	327 100.0
合計	13 2.2	105 18.1	17 2.9	29 5.0	24 4.1	11 1.9	580 100.0

表2-6 15歳の頃の家の暮らし向き

		15歳の頃の家の暮らし向き (本人の年齢別・学歴別)				合計
		豊かな方	ふつう	貧しい方	無回答	
年齢別	20-35歳	14 9.0	122 78.2	19 12.2	1 0.6	156 100.0
	36-50歳	33 13.5	159 65.2	51 20.9	1 0.4	244 100.0
	51歳以上	18 10.0	104 57.8	57 31.7	1 0.6	180 100.0
学歴別	中卒	0 0.0	3 25.0	9 75.0	0 0.0	12 100.0
	高卒	10 4.5	141 63.2	71 31.8	1 0.4	223 100.0
	短大卒	24 15.7	110 71.9	19 12.4	0 0.0	153 100.0
	大卒	31 16.3	131 68.9	26 13.7	2 1.1	190 100.0
	無回答	0 0.0	0 0.0	2 100.0	0 0.0	2 100.0
	合計	65 11.2	385 66.4	127 21.9	3 0.5	580 100.0

III 調査の結果 一素集計を中心に一

(1) 日常生活上の諸能力

日常生活上の諸能力に関しては、29 項目設定し、「日頃の生活でどの程度できるか」を、それぞれ、「よくできる」「だいたいできる」「少し苦手」「とても苦手」の4段階評定で回答を得た。表 3-1 は、「よくできる」「だいたいできる」と回答した人数とその割合を示している。

「よくできる」「だいたいできる」という回答が最も多かったのは、「漢字を読む」(89.3%)であり、「簡単な計算をする」(87.7%)、「自分の生活に必要な情報を収集する」(84.2%)とつづいている。一方、「よくできる」「だいたいできる」という回答が最も少なかったのは、「道をたずねた外国人に、英語で教える」(20.6%)であった。

表 3-1 日常生活上の諸能力

	人数	%
漢字を読む	517	89.3
漢字を書く	375	64.7
ひとつのまとまった文章を書く	354	61.0
改まったあいさつ状を書く	267	46.2
長い文章を読んで、要点をまとめる	338	58.4
公の場で、人の前に立ってスピーチをする	212	36.7
カタカナ語(外来語など)の意味を理解する	296	51.4
ワープロやパソコンで文書を作る	330	57.0
簡単な計算をする	504	87.7
道をたずねた外国人に、英語で教える	119	20.6
説明書を見ながら、ビデオの接続をする	314	54.5
新聞の第一面に載っている記事の内容を理解する	424	73.4
問題の解決にむけて、具体的な対策を立てて実行する	357	61.9
自分の意欲や関心を常に高めようとする	421	73.3
町内会や地域の行事に積極的に参加する	242	42.2
町内会や自治会で、人の意見をまとめたり、リーダーになったりする	153	26.5
町内会や自治会で、与えられた役割を責任を持って遂行する	401	69.6
計画的に生活費を使う	381	65.9
近所や地域の人とうまくつきあう	447	77.3
自分の生活に必要な情報を収集する	484	84.2
加入する生命保険の内容を理解する	310	53.8
洗濯表示を活用して、適切な方法で洗濯する	397	68.4
簡単な繕い物をする	391	67.5
靴を磨く	446	77.2
栄養バランスの良い食事をつくる	340	58.7
食品の鮮度を見分ける	422	73.1
食事の後片付けをする	449	77.5
トイレを掃除する	433	74.9
郵便局や銀行の振り込みを機械で行う	443	76.8

(2) 仕事上の諸能力

仕事上の諸能力に関しては、28 項目設定し、それぞれ、「よくできる」「だいたいできる」「少し苦手」「とても苦手」の4段階評定で回答を得た。表 3-2 は、「よくできる」「だいたいできる」と回答した人数とその割合を示している。

「よくできる」「だいたいできる」という回答が最も多かったのは「自分の担当した仕事を、責任をもって遂行する」(96.0%)であり、次いで「簡単な計算をする」(94.3%)、「漢字を読む」(93.0%)であった。「よくできる」「だいたいできる」という人が大幅に半数に満たなかったのは、「外国人に、外国語で対応する」(14.1%)と「インターネットやEメールを使う」(34.8%)の2項目のみであった。

表 3-2 仕事上の諸能力

	人数	%
漢字を読む	372	93.0
漢字を書く	289	72.3
簡単な計算をする	379	94.3
ひとつのまとまった文章を書く	282	71.0
改まったあいさつ状を書く	219	54.8
長い文章を読んで、要点をまとめる	261	65.4
仕事の場で、人の前に立ってスピーチをする	195	48.9
外国人に、外国語で対応する	56	14.1
ワープロやパソコンで文書を作る	250	62.8
全体の動向を考慮にいれて判断する	313	78.1
仕事のできばえを、正しく評価する	335	84.0
自分の担当した仕事を、責任をもって遂行する	385	96.0
周囲の人とうまく仕事をする	363	90.5
仕事上の作法に従って行動する	371	92.5
周囲の人の行動を観察して、自分の仕事に生かす	358	89.5
専門的な知識や技能を職務に生かす	334	83.9
相手の気持ちを損なうことなく、理解、納得させる	299	74.6
報告書や書類の内容を手際よく理解する	312	78.2
課題達成のために計画を立てる	286	71.9
インターネットやEメールを使う	136	34.8
問題の解決に向けて、具体的な対策を実行する	295	74.3
目標達成のために、積極的に行動する	306	76.9
前例にとらわれず、状況の変化に対応する	295	74.1
自分の意欲や関心を常に高めようとする	321	80.3
仕事の成果が出るまで、努力し続ける	325	81.5
決められた時間内に正確に仕事をこなす	324	81.2
必要な情報を広く集める	290	72.9
リーダーシップを発揮して、仕事をやり遂げる	246	61.8

(3) 学校知・時事問題の認知

学校知に関して 12 項目、時事問題に関して 12 項目をそれぞれ設定し、「よく説明できる」「少し説明できる」「あまり説明できない」「まったく説明できない」の 4 段階評定で回答を得た。

表 3-3 は、「よく説明できる」「少し説明できる」と回答した人数とその割合を示している。ほとんどの項目において過半数の人が説明できると答えており、半数に満たない項目は、学校知の「OPEC」(41.7%)、「三平方の定理」(48.7%)、時事問題の「ガイドライン法」(41.9%)、の 3 項目のみであった。

表 3-3 学校知・時事問題の認知度

		人数	%
学校知	非核三原則	380	66.5
	三権分立	402	70.0
	OPEC	237	41.7
	モンスーン	314	55.1
	ペリー来航	412	72.0
	源頼朝	350	61.5
	リトマス紙	489	84.7
	日食	465	81.2
	融点と沸点	388	68.1
	動脈と静脈	469	82.6
	三平方の定理(ピタゴラスの定理)	278	48.7
	円すいの体積の求め方	320	55.7
時事問題	コソボ空爆	333	58.3
	通貨「ユーロ」	380	66.4
	クローン技術	417	73.2
	改正男女雇用機会均等法	430	75.0
	不良債権	402	70.3
	ダイオキシシン	475	82.9
	テポドン	364	64.2
	臓器移植	480	84.1
	ガイドライン法	237	41.9
	コンピュータ2000年問題	418	72.8
	環境ホルモン	352	61.9
	IOC五輪招致疑惑	382	66.7

(4) 学歴意識

①学歴満足度

表 3-4 は、学歴満足度に関する設問において、「今の学歴で十分」と回答した人数と割合について、学歴別に示したものである。この表より、学歴の高い人ほど学歴満足度が高いということが明らかである。

表 3-4 学歴満足度(学歴別)

	人数	%
中卒	1	8.3
高卒	86	39.1
短大卒	92	60.5
大卒	151	80.7

②学歴効用感

学歴効用感に関しては 3 項目を設定し、それぞれ、「よくある」「時々ある」「あまりない」「まったくない」の 4 段階評定で回答を得た。表 3-5 は、「よくある」「時々ある」と回答した人数とその割合を学歴別に示している。どの項目においても、学歴の高い人ほど学歴効用感を感じる傾向にある。

表 3-5 学歴効用感(学歴別)

	一般教養や生活態度のため、学校を出た甲斐がある		友人やコネが得意、得をすることがある		学校のレッテルによって、よい仕事を与えられたりする	
中卒	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
高卒	82	37.1%	36	16.1%	28	12.6%
短大卒	83	55.3%	32	21.3%	25	16.7%
大卒	112	59.9%	69	36.5%	43	22.8%

③学歴による不利な経験

学歴による不利な経験については、「学歴効用感」と同様、4 段階評定で回答を得ている。表 3-6 は、「よくある」「時々ある」と回答した人数とその割合を学歴別に示している。どの項目においても、学歴の低い人ほど学歴による不利な経験があると答えている。

表 3-6 学歴による不利な経験(学歴別)

	公の書類等で恥ずかしい思いをする		職場や地域の人間関係の中で肩身の狭い思いをする		結婚話や親戚付き合いの中で肩身の狭い思いをする		仕事などで評価してもらえないと思う	
中卒	9	75.0%	7	58.3%	6	50.0%	5	41.7%
高卒	75	33.8%	56	25.2%	34	15.2%	54	24.2%
短大卒	25	16.7%	21	14.0%	17	11.3%	19	12.8%
大卒	14	7.4%	14	7.5%	6	3.2%	9	4.8%

発表当日は、諸能力の規定要因及び学歴意識との関連についての分析結果を報告する。

《参考文献》

広島大学教育社会学研究室 1998, 「学歴意識に関する調査研究(1)」『教育社会学研究年報』第 1 号, 1-31 頁。

広島大学教育社会学研究室 1999, 「学歴意識に関する調査研究(2)」『教育社会学研究年報』第 2 号, 1-27 頁。